

# な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
な か ま 編 集 係

〒285-0025  
佐倉市 錦木町 198-3  
電話 (043) 485-1801

2 ページ 遠い夏の日の記憶 ..... 岩淵幸雄  
3 ページ 佐倉っ子を見守ろう ..... 秋葉恵子

納涼怪談噺 ..... 永見 一  
海上の奇跡 ..... 清水久四郎

## 菜 園

原田 和行

野菜を作り始めて十四、五年になる。自宅前の道路を隔てた空き地七十坪ほどを四家族で借りて、週末と休日利用の全く未経験からの家庭菜園であった。妻は少し経験があったので、妻に勧められて始めたと言ったほうがよい。

当初は、じゃがいも、ミニトマト、きゅうり、さつまいも、キャベツなど初心者でも作りやすい野菜を栽培した。

畑が自宅に近いので、庭の水道からホースを引いて水撒きが出来、又必要な時にいつでも新鮮な野菜を取ることが出来る便利さがあった。

その後その土地が駐車場となり、代替地として紹介されたのが今も借りている畑である。距離にして自宅から徒歩十分ほどの、周囲一面畑の農地である。地主からは二百坪でも三百坪でも好きなだけ使

つていいと言われたが、一人で農作業するにも限度があり結局百坪を借りた。

会社の定年退職を機に毎日が休日の自由人となり、趣味と実益を兼ねての無農薬野菜作りへの再スタートであった。

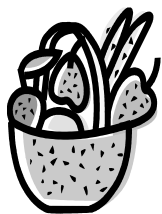
野菜の種類も増え、夏期には西瓜、トマト、とうもろこし、茄子、かぼちゃ、きゅうり、じゃがいも、等々。四季折々の野菜を作っている。

私は現在佐倉の歴史について学んでいる。私が畑を借りているこの地区は、江戸時代に佐倉藩の「御菜園」があったことを最近知った。江戸時代中期の佐倉藩士渡辺善右衛門の著作『古今佐倉真佐子』の文を一部引用すると、「此の山の坂下り、前より五丁斗、たんたんあがりに行けば（江原）也。左右五丁斗の間

組長屋ある。初、此先左右共に御さゑん（菜園）也。」

寛文年間（一六六〇年代）佐倉藩家臣の長屋と菜園を設け、野菜、薬草とお茶を栽培し城中へ供給していた。現在の住宅団地の造成前までは「菜園」「菜園前」の地名も残っていたようである。

家庭菜園の功用は新鮮な野菜の収穫も然ることながら、周辺で菜園をやっている仲間との交流がある。収穫祭と称して、畑の片隅で年に一、二回、お互いの収穫物を持ち寄つての懇親会も楽しみの一つである。例えば芋煮の大鍋を囲んでの談話に花が咲き、話も一段と声高となり勝ちだが、青空天井の下何ら遠慮することもない気楽なひとときである。自然を相手に、日々是好日。



(編集委員)

## 遠い夏の日の記憶

焼夷弾で焼き尽され、灰だけとなった家の前で、いつまでも立ち尽して居られない。母は？ きつと避難してる筈だ。従兄弟の所は？ やはり何も残ってない。浜町の本家は？ 同じだ。こんなに行けども行けども家一軒も無い焼跡だけの街なんて、これまで想像も出来なかった。三月に東京が遭られ、そのうちとは思っていたが、これほどとは。一日中歩きまわり、夕方やっと学校前の知人の家に辿り着いた。「大丈夫、母さんきつと避難してるよ。そのうち帰ってくるから」火の中を逃げまわり、田圃の用水路で熱さを凌ぎ、隣の村まで避難した母が帰って来たのは翌日夕方だった。

が七月三十一日。八甲田山の山裾の小さな村。その後戦争がどうなったか全く判らぬまま夏休みに入った。広島と長崎が新型爆弾で全滅した様だ。新型爆弾でどんなものか見当もつかない。焚き付け用の枯れ枝を拾いに山に入り、駅まで降りて来た時、様子が変だった。誰も歩いてない。いつも威張って監視してた軍人が、丸太に腰を下ろし、がっくりと肩を落としていて。急いで家に帰り、聞けば戦争に敗けたんだと。「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び、以って万世のために太平を開かんと欲す」信じられない天皇陛下の声。敗戦国民となつて、これまでに以上の苦難を堪え忍んで生きてゆくのか。深く深く息を吸い込み、ゆっくりと胸の奥から少しずつ吐き出した軍国少年最後の日。八月十五日。

(上座 岩渕幸雄)

## 納涼怪談噺

三十度を超す暑い毎日が続くそんな季節の過ごし方は、クーラーの下で涼むばかりではない。体がゾクゾクし、芯から涼しくなる方法…そう、夏の風物詩「怪談噺」だ。日本の怪談噺の持つ空気感、怖さは決して他国にはないものだ。怪談という娯楽が誕生したのは一七〇〇年前後、元禄歌舞伎の見せ場である怨霊事が始まりで、これは能の「道成寺」が起源といわれている。お寺で輪廻を軸に正しい人の道を教えるために、不実の男に女の恨みをかわらないように説教したことが始まりのようである。

時代には合理主義の思想が入り幽霊は「ありえない」という風潮になるが、その後も人氣は衰えず、落語、講談、歌舞伎などを通して現在まで演じ継がれている。怪談の見どころは何と言っても仕掛けの面白さがある。おどろおどろしい凝った舞台メイクは一見の価値がある。旦那衆が茶屋遊びに講釈師貞山を呼び怪談噺を演じさせる。居並ぶ芸子はあまりの怖さに隣の旦那に抱きつくという図は夏の茶屋風景の一つである。講釈師、冬は義士夏は幽霊で飯をくい。人間同志でのトラブルは色か金、地位か名譽のどれかで、そのしがらみや人間関係の、どろどろした思いや葛藤が恐さを醸し出すのである。怖い物見たさっていうのもあるのかもしれない。

(上志津 永見 一)

## 佐倉つ子を見守ろう

お母さんのお腹から元気な産声をあげ、一つの命が生まれてきました。お父さん、お母さん、おじい様おばあ様方と命を慈しみながら育てています。子どもが泣くと新米ママは何処に相談してよいか迷ってしまいます。お腹が空いているのか、オムツが濡れているのか、又は熱があり体調が悪くなる前兆なのか、そこでおばあ様のアドバイスがとても大切です。

昭和の後期頃から核家族化が進み子育ても少しずつ変化してきました。子育ての悩みも以前の大家族の中での子育てと違い、相談出来ない家庭状況となり、保育園が育児相談を始めました。相談の内容は時代を反映してか、以前は「おねしょが直らないのでどうしたらよいか」や「言葉が出ない」等の相談が主でした。最近では幼稚園や保育園の入園

について、発達相談、離乳食の相談が多くなっています。又多すぎる情報にどれを取捨選択すれば良いか迷っているようです。

少子化の進む中、佐倉市の出生率は一・〇四と千葉県内でも最下位の部に入っています。保育園が子育ての拠点として、お母さん達への分りやすい情報提供、ママ友達つくりのお手伝い、離乳食の試食会等を実施するなど子育てしやすい環境作りを進めています。国の施策でも、子ども手当の支給や幼稚園と保育園を一体化して、幼児教育の質の向上を目指して検討しています。

子育ては、ほんの短い間です。しっかりとお子さんと向き合い受け入れてください。お子さんは満足して成長へと繋がっていきます。家族と保育園、地域が連携して佐倉つ子を見守り、育てていきたいと思えます。

(鈴木町 秋葉恵子)

## 海上の奇跡

友人から城東支部展の案内を受けて、東京都江東区に行き、日本画の「海の墓標」を見せていただいた。この絵は戦艦「大和」を墓標に見立てて描いたものである。

その絵の下のインタビュー記事には「大和」の語り部である小林健さんの体験が述べられていた。

昭和十九年、二十二歳の時に「大和」に配属。レイテ沖海戦直前の話である。

「大和」をはじめて見たときは船というより山という印象でした。艦橋が一番高いところ、主砲射撃指揮所というところに配置された。このてっぺんから停泊する連合艦隊を見渡したときには、どれだけ満足したことか。「大和で死ぬれば満足だ」と思った。

昭和二十年四月「大和」は沖繩特攻の命を受ける。

出撃前夜、艦内で会食し、

家族に遺言を書いた。明けて四月六日の午後三時半、総員配置に就け」の命令で出発した。そして副長から「これは海上特攻隊だから、生きてかえることはない。全員死ぬんだ」という命令を受け、「海ゆかば」も斉唱して、故郷への挨拶をした。

翌日、雨でした。望遠鏡も双眼鏡も使えず、主砲も撃てず。米機はレーダーを使って急降下で攻撃する。やがて「総員、待避、上甲板」の艦長の命令が出る。艦の左半分は波に吞まれ、水面が足元から三メートルほどになって、飛び込み、渦巻きに引き込まれた。間もなく、「大和」は大爆発した。そして漂流すること五時間、駆逐艦に救われ、そのとき寒さと恐ろしさで震えがあったと言う。

海上で長い時間どのように過ごしたのか、運命を感じ、奇跡的な話である。

(上座 清水久四郎)

## 8月の黒板

# 『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

### わくわく道

「じいじい」と娘の孫たちに呼ばれている。娘も妻も、孫たちの前ではそう呼ぶ。これは仕方ない。覚悟はしていた。だが、娘のダンナにそう呼ばれたときには、思わず周りを見回してしまっただ。

電車で初めて席を譲られてシヨックを受けた、という話はよく聞く。若い人に声をかけられて、思わず周りを見回した人、けっこういるのでは。

### あとがき

私事ですが、先日羽田空港を利用した際、荷物を一つ置き忘れるという失敗をしました。幸い荷物は戻ってきたのですが、最近物忘れが多くなったように思います。元来の好奇心から増えた肩の荷を、この辺りで自分の事業仕分けをして、身分に相応に減らす必要性を感じています。四年間のカレッジ生活では学ぶ事が多かった分、活動範

若いころは、年寄りを身も心も一緒に思っていた。ここにきてわかったことだが、年は取っても心はそんなにも変わらないものなのだ。

体力の衰えは覆うべくもないし、あちこち痛む節々は氣力を削ぐ。このつえ大病でもしたらどうなるかわからないけれど、変わる部分にこだわって、せめて背すじはシャンとしていたい。

(巴 安治)

囲も広くなりました。しかしこれから先の責任能力を考えると、「出来る事を確実に」をモットーに、身のスリム化を図っていいと思います。編集委員としては名ばかりでしたが、今月で『なかま』の一読者に戻ることに致しました。諸先輩方から色々と学ぶことの多かった二年間でした。これからの『なかま』の益々のご発展を、こころよりお祈り申し上げます。

(伊藤由紀子)